

## 小学校との連携による日本画教育の意味 (2)

—初等教育と高等教育との架橋領域における授業実践の効果に着目して—  
Japanese Painting Education through Collaboration between Elementary School and University of Arts (2)

Wataru Kawashima 川嶋 渉 (Kyoto City University of Arts 京都市立芸術大学)  
Taku Mitsuhashi 三橋 卓 (Kyoto City University of Arts 京都市立芸術大学)  
Manabu Yokota 横田 学 (Kyoto City University of Arts 京都市立芸術大学)  
Shimpei Takeuchi 竹内 晋平 (Nara University of Education 奈良教育大学)

### <あらまし>

本学と境谷小学校との連携による毛筆画指導が、初等教育と高等教育の双方に教育効果があることを明らかにするとともに、この架橋領域において授業実践を行うことの意義創出を目的とした。2017年度の芸術連携事業による図画工作科指導に対する考察を行った結果、3年生児童と日本画大学院生の双方に知識・技能に関連した学びの成果があることが示唆された。

### <キーワード>

日本画教育、毛筆画指導、芸術連携事業、架橋領域

### 1. はじめに

本研究は、筆者らによる前報「小学校との連携による日本画教育の意味 (1) -学部生・大学院生を軸とした社会発信の試み-」<sup>1</sup>からの継続研究である。前報においては、5カ年にわたる京都市立芸術大学と京都市立境谷小学校との芸術連携事業の成果と課題についての考察を試みたが、初等教育と高等教育の架橋領域における学びの相関や相乗効果についての議論を行うには至っていない。

そこで本研究においては、上記の芸術連携事業が初等教育と高等教育の双方に対する教育効果向上に資することを解明し、さらに架橋領域において授業実践を行うことの意義を積極的に創出することを目的とした。このため、本稿では2017年度に実施した芸術連携事業について報告するとともに、小学生および日本画大学院生の学びについて分析を試みていきたい。

なお次章以降、本文においては京都市立芸術大学を本学、京都市立境谷小学校を境谷小学校と表記する。

### 2. 学校・地域等との芸術連携によって大学教育の成果を子どもに発信する取組を扱った先例研究の動向

本研究において中心的に扱う、学校や地域に向けて芸術活動を発信する連携によって大学生・大学院生等の学びに繋げることを意図した先行研究にはどのようなものがあるのかについて言及したい。

三澤一実は、小学校や中学校及び高等学校など140校において「旅するムサビプロジェクト」を行い、その核となるプログラムとして大学生の作品を持ち込んだ対話型の鑑賞を展開した実践事例について報告している<sup>2</sup>。この「旅するムサビ」は、学校を作品発表の場として活用することが主眼ではなく、学生自身が児童・生徒の鑑賞活動をファシリテートすることによって、造形批評力の育成を重視している点が先駆的であり、特筆すべき着眼点であると考えられる。初等教育と高等教育との架橋領域における芸術連携を通じた大学生への教育効果を検討する上で、三澤による一連のプロジェクトからの示唆は意義深いといえる。

そして本田悟郎の論考においては、大学生が図画工作の題材と照らし合わせて企画した美術館における3カ年にわたるワークショップ実践の経過とその効果についての考察がなされている<sup>3</sup>。同論考においては、参加した学生の学びとして「子どもの造形表現支援を通して、美術教育に携わる上での諸能力を高めることに繋がる」<sup>4</sup>と指摘されている。児童に対しては造形に関わる学びの機会を提供する一方で、大学生の実践的指導力を高めるための取組にもなっていると考えられる。

一方で筒井通子からは保育者養成の立場から、大学生が授業等で制作した作品を地域イベント等に展示し、幼児・児童に向けて造形表現の成果を発信した芸術連携事

業の成果についての報告がなされている<sup>5</sup>。学生にとっては、保育者としての基礎的な能力とともに造形に関する技能の向上が期待できる有効な芸術連携事業であるといえよう。

第3章においては、芸術連携事業の枠組に関して予備的に検討するとともに、実践に至るまでの経緯について述べることとする。

### 3. 京都市立境谷小学校との連携による芸術連携事業

#### (1) 過去5カ年の成果と課題

前報においてもふれたように、本学と境谷小学校との芸術連携事業は2011年より卒業生による「境谷小レジデンス」として開始したのが発端である。その後、2012年からは5年間にわたり、本学日本画研究室と教職課程研究室との協働により毛筆画指導が進められている。境谷小学校における毛筆画指導は、開始当初より図画工作科(3年生)の題材として授業実践を行うために、4観点(「造形への関心・意欲・態度」、「発想や構想の能力」、「創造的な技能」、「鑑賞の能力」)に基づいた学習目標や評価規準等を設定するなど、教科学習としての条件を整えてきた。これは学校外で行われるワークショップやアートイベント等との相違点であり、本学と境谷小学校との緊密な連携事業であるからこそ可能となった特色ある授業実践であるといえよう。

しかし、これまでの5カ年の芸術連携事業においては、参加する大学生・大学院生の学びについて明確に概念化できていない。境谷小学校で3年生児童に毛筆画指導することが、大学生・大学院生にとって教育実践力の向上につながるのか、あるいは芸術を学ぶ上での技能の形成につながるのかについての議論が十分でなかったと考えられる。芸術連携事業に携わった大学生・大学院生らにとって、単に「児童に教える経験ができた」「日常の制作活動とは違う体験になった」という印象で終わるのではなく、「どのような学びにつながったのか」を認識できる活動でなければならない。また、小学校と芸術大学が連携することが、教育の効果を高めることにつながるのかどうかについても、これまでの芸術連携事業において検証には至っていない。架橋領域において連携することによる相乗的な効果についても明らかにすべきであろう。

そこで本研究では下記3点の立場をとり、これまで5カ年の実績をもとにして、教育効果をより明確にするための連携事業を実践することとした。

- ・ 初等教育(図画工作科教育)および高等教育(日本画教育)の両者に教育効果が得られる芸術連携事業を推進する。

- ・ 両者の教育効果については、「どのような学びにつながったのか」についての分析を行う。
- ・ 両者の架橋領域において芸術連携事業を行う意義を積極的に創出する。

#### (2) 芸術連携事業(2017年度)の概略

過去5カ年の事業の蓄積に加え、課題となった教育効果の検証についても扱うべく、2017年度の芸術連携活動の実施計画を検討した。とりわけ芸術連携事業を通しての大学院生に対する教育効果について、前報においては「造形活動(日本画実技)をめぐる感覚や認識に関する言語活動の経験は、学部生・大学院生の専門的力量的形成につながるのではないか」<sup>6</sup>としていた。それを踏まえて2017年度は、この「専門的力量的」が具体的に何を指し示すのか、日本画のどのような知識や技能の向上に資するのかについて明らかにした上で芸術連携を進める必要があると考えた。

筆者らおよび日本画大学院生との間で議論を行った結果、2017年度の芸術連携においては、児童への図画工作科指導に携わることを通して「日本画制作における概念化が難しい感覚や認識」を可能なきり言語化することを重視することとした。一般的に、日本画の制作過程における様々な感覚や認識は、伝達が難しい場合も多いと考えられる。しかし、日本画大学院生が図画工作科指導において児童に描き方を演示したり説明したりすることによって、自身の制作について再認識し、課題の自覚につながるのではないかと仮説に至った。

以上の方針により、2017年度の芸術連携事業を推進することとした。以下に示すのは授業実施を含めた事業全体の手続きである。

- 2017年5月 ・ 本学と京都市立境谷小学校との連携による授業実践に向けた打ち合わせ  
(竹内、境谷小学校教員)
- 6月 ・ 京都市立境谷小学校での毛筆画指導の先行実施 (竹内、境谷小学校教員)  
・ 先行実施における児童からの質問・反応等に基づき、日本画大学院生とともに指導内容の打ち合わせ  
(川嶋、三橋、横田、竹内)
- ・ 日本画研究室の教員・大学院生による毛筆画指導の本実施  
(川嶋、三橋、横田、竹内、および境谷小学校教員)
- 11月 ・ 実践のまとめ、および成果報告に関する打ち合わせ  
(川嶋、三橋、横田、竹内)

#### 4. 芸術連携事業（2017年度）による教育効果

##### (1) 図画工作科教育としての児童に対する効果<sup>7</sup>

図1に示すように、本学と境谷小学校との芸術連携事業は「小学校教員」「実技系研究者」「教育系研究者」の三者によって構成された組織に「日本画大学院生」を加えたメンバーによって実施された。2017年度の芸術連携事業を通して「3年生児童」および「日本画大学院生」にのっの「学びの架橋領域」を構成することを意図したが、本節においては毛筆画を扱う図画工作科学習を行うことによって、「3年生児童」に対してどのような教育効果があったのかについて述べることにする。

前章においてもふれたが、本学と境谷小学校との芸術連携事業は、図画工作科における毛筆画の授業実践が中心であった。授業の概略は下記のとおりである。

- ・題材名 : 「黒と白とであざやかに」
- ・学年 : 3年生児童 (35名)
- ・指導者 : 京都市立境谷小学校教員、実技系研究者 (川嶋、三橋)、教育系研究者 (横田、竹内)、日本画大学院生 (5名)
- ・指導計画 :
  - 第1次 臨写を行うための臨本について知るとともに、自身が描きたいモチーフを選ぶ (先行実施、45分×1)。
  - 第2次 臨本をよく観察し、自身の工夫によって描くことを試みる (先行実施 45分×2)。
  - 第3次 日本画大学院生の描き方を見学することを通して、毛筆画の技法を習得する (本実施 45分×2)。

3年生児童は、国語科の書写において毛筆の学習を行っているため用具を扱うことは初めてではないが、墨で描画を行う経験は少ないのが実態である。そこで、本授業実践では臨本を活用して、それらの作例において使用されている技法を児童が習得することを学習活動の中心と

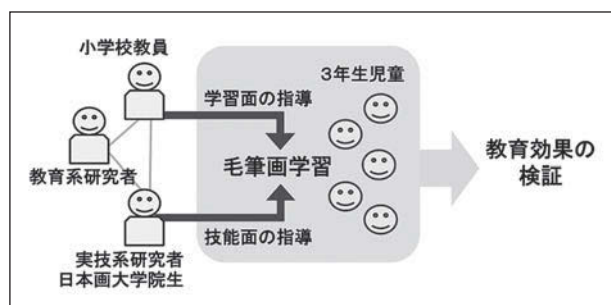


図1 初等教育と高等教育との架橋領域における芸術連携事業の仕組み

した。現代の学校教育において墨を扱った題材は珍しいものではなく、図画工作科教科書等にも散見される<sup>8</sup>。このような題材においては、墨や毛筆を学習に使用することによってどのような学びにつながるのかについて明確なねらいをもつことは重要であると考えられる。今回の指導では、この点に問題意識をもち3年生児童に墨や毛筆に関する技法を習得させることに主眼をおいた指導を展開した。

墨や毛筆の特徴的な技法として付立をあげることができる。付立は、円山応挙 (1733-1795) によって確立されたモチーフの輪郭線を描かずに筆の幅を利用して対象の面を描く表現方法である。佐々木丞平は付立に関して、「墨による強い輪郭線を用いている描法では描いたものが平板に見えてしまうのに対し、この描法であれば形体の柔らかな自然な表現には適している」<sup>9</sup>と述べている。今回の毛筆画指導では、使用した臨本<sup>10</sup>に使用されている付立に着目し、児童が「筆を立てたりねかしたりして、面を描く」という技法を習得させたいと考えた。第2次においては、3年生児童が試行錯誤しながら臨本を写して描こうと挑戦したが、多くの児童らにとっては思い通りの臨写には至らなかったようである。第3次で日本画大学院生や実技系研究者が、付立を含んだ運筆等の演示を行った。するとその後の3年生児童らの描写、特に葉の表現に変容がみられた。図2・3からは、第2次と比較して第3次の描写では付立が多用 (図中、破線の箇所) されるように変容した傾向を読み取ることができる。以下に示すのは、第3次終了時の3年生児童らによる記述で

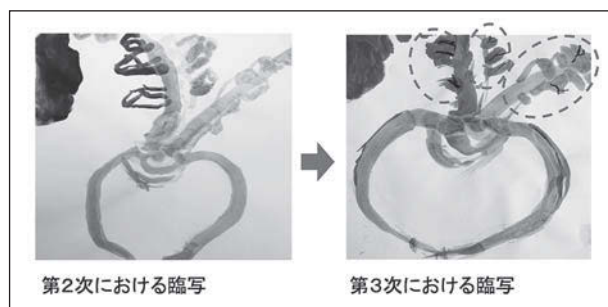


図2 A児による葉の描写の変容 (臨本: かぶら)

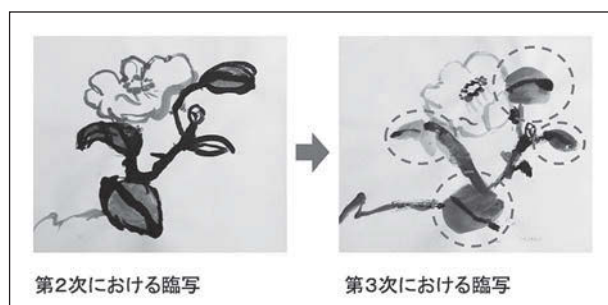


図3 B児による葉の描写の変容 (臨本: 椿)



ある（記述全体の中から、筆者が一部を抜粋した）。

「つばきの花の下が一番大きい葉っぱが上手に丸みをもってかくことができるようになりました」（C児）

「はじめは、はっぱの形がへんな形になってしまったけど、日本画の先生に、はっぱのかたちの描き方を教えてもらって、とてもうまくかけるようになりました」（D児）

「前はすぐあきらめていたけど先生に教えてもらってとてもうれしかったです」（E児）

上記の記述から、3年生児童らは自身の変容を認識していることがわかる。具体的には「かくことができるようになりました」（C児）や「とてもうまくかけるようになりました」（D児）などの記述から読み取ることができるように、技法を習得したことへの3年生児童らの実感が垣間見られる。第2次において児童自身の工夫では得ることができなかった技法があることを確認し、第3次で日本画大学院生の演説を見たり直接の指導を受けたりして新たな技法の数々（図4）を手中にしたことへの喜びが、「教えてもらってとてもうれしかったです」（E児）という文章で表現されているのではないだろうか。紙幅の関係から、すべての3年生児童の作例やコメントを掲載する事は控えるが、多くの児童が日本画大学院生の指導を通して付立などを中心とする「創造的な技能」を高めるといふ学びがあったことが確認できた。この点から、芸術系大学である本学との連携による毛筆画指導は、3年生児童への一定の教育効果があったといえる。

本節で示した3年生児童への指導を行った日本画大学院生が、その経験を通して日本画の制作研究に関して何を学んだのかについては、次節において詳述する。

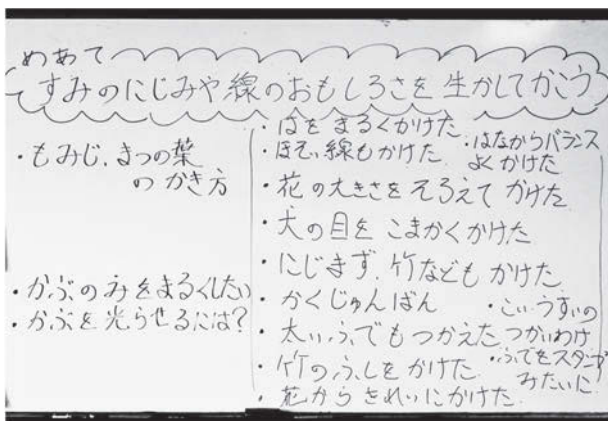


図4 第3次・終盤の板書に列記された3年生児童が習得した技法（右側部分）

## (2) 日本画教育としての大学院生に対する効果

現在の大学・大学院等で展開されている日本画教育に関する報告等は少数である。高等学校における水墨画についての報告事例が散見<sup>11</sup>されるが、特に専門的力量に関する大学での制作研究指導についての理論的な研究は、ほとんど見られない。2008年刊行の『美術手帖』に掲載された記事、「日本画の教育 美大の日本画科では何が行われているか?」<sup>12</sup>は、数少ない大学における日本画教育を扱った言説の1つである。しかし、学生の専門的力量がどのようなプロセスによって形成されているのかについて、詳細には論じられていない。この点に関連して下川辰彦は、「日本画の伝統的な古画技法についての実践的な研究は、近世まで各流派による秘事口伝として伝えられてきたこともあり、未だ解明されていない点が多く残されている」<sup>13</sup>と指摘している。

そこで筆者らは、本学と境谷小学校との芸術連携事業を活用し、3年生児童への図画工作科指導に参加する日本画大学院生に対して専門的力量をより高めることを意図した。大学院生が習得できる専門的力量として、本研究で検討の対象とするのは下記2点である。

### 【1】作画に関する宣言的知識

構図の決定やモチーフの把握、臨本の分析などの思考や判断を行うために必要となる理論や視点。造形の原理に基づいた考え方や美術史的な文脈による見方なども含まれる。

（例）モチーフや臨本に対する造形的な分析力、合理的に描画する順序の理解、日本画（水墨画）特有の表現原理の理解、画題がもつ意味や隠喩の理解、等

### 【2】作画に関する手続き的知識

日本画制作の過程における運筆や色料の扱い等に含まれる操作および身体感覚などに関する暗黙知。特に、これまで可視化や言語化が行われてこなかったもの。

（例）筆を扱う際の力加減、筆先の状態の把握、打ち込みにおける角度の制御、岩絵の具や墨などの濃度調整、線描における太細の制御、擦れや滲みの調整、等

前章において述べたように、本年度の授業実践では日本画大学院生が「日本画制作における概念化が難しい感覚や認識」を言語化することによって、制作上の課題を自覚することにつなげることを重視している。そこで、本研究においては上記のように認知科学の知見<sup>14</sup>を援用して、【1】作画に関する宣言的知識、【2】作画に関する

日本画大学院生による省察的記述（抜粋は筆者による）

抽出された知識の内容

大学院生 A

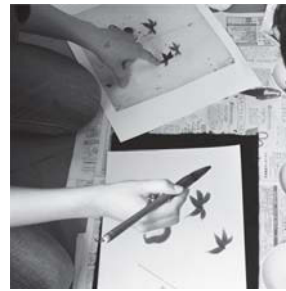
「私は椿という、描く順番、筆の向きが大切なお手本を担当しました【2】。自身でも再度練習し、わかりやすいように言語化して伝え、筆の濡れ方や向きを逐一確認して児童に描かせるという作業をする中で、改めて自身の日本画制作における骨格理解や、水分量に対する意識の低さに気が付きました【2】。モチーフの骨格理解は画面の骨格理解にも繋がっていると思います。『どうして、そう描くのか。』それを決めているのは骨格理解が大いに関係しているにも関わらず、私の場合その大部分をなんとなくの感覚で補ってしまっていたように感じます【1】」



- 【1】・「椿」の臨本を分析することによる、描く順序の理解、およびモチーフの骨格とそれに応じた描法の理解
- 【2】・事前準備や授業実践における操作の言語化を通じた、筆先の状態把握（水分量、筆先の向きの制御）

大学院生 B

「墨の濃淡による色彩の発見。色彩には、色味、彩度、明度と要素があるが、私はいつも色単体が持つ色味と彩度に意識が奪われてしまい、明度で絵を見るができなかった。しかし、水墨は墨の濃淡で色を表現する。それは、色味の組合せや彩度の煌めきではなく墨一色の淡いと濃いで世の色彩のすべてを表現する。言い換えると、改めてその墨の世界に色彩を孕んでいることを知った【1】。色味が豊かだから、彩度が鮮やかだからと言って絵は必ずしも美しいものにはならない。濃淡にある東洋の遠近感と色彩の奥行きを改めて得たワークショップであった【1】」



- 【1】・事前準備や授業実践における水墨の経験に基づいた、墨の濃淡が暗喩する色彩感の広がり発見  
・授業実践を通じた、東洋的な空間表現の再認識

大学院生 C

「今回の授業で、犬の水墨画を担当した。描いていて気になったことは、筆線の巧みな表現だ。細い線の抑揚が犬の首や背骨、フワフワとした毛並みを表すように、線は『枠』ではなく形そのものなのだというところを、犬の絵一枚から学んだ【2】。その線をなかなか思うように表現しきれなかった点が今回の反省点である。授業後の話し合いで、日本画制作で、描くことが『塗り絵』作業になっている学生もいるという意見をきいて、私自身ドキッとしました。自分の絵の中で、線は単なる『枠』になってはいないだろうか？と考え直す機会になった。線は作品の骨格だということを再認識することができた【1】」



- 【1】・授業実践を通じた、作画の骨格としての筆線についての理解
- 【2】・「子犬」の臨本を分析することによる、筆線の役割と効果的な筆法への理解

大学院生 D

「お手本に関連して、初回の頃は写すことで精一杯だったが、回を重ねて様々な質感が組み合わされている面白さを体感的に気付けるようになった。（犬の毛=薄い色の乾いた線、松葉=細くて鋭い線という紙の上のものという認識ではなく、毛や松葉を描いているという意識が出来るようになった？）筆一本と墨だけで短時間で再現出来るお手本ばかりだが、大学生でも学ぶところが多いとても優れたお手本だと再認識した【1】。現代の日本画だと質感表現は絵の具のマチエール表現に頼りがちだが、筆法や濃淡での質感表現を自身の制作でも生かそうと試みている【2】。また、様々な質感表現、その組み合わせの面白さを学んだことで、普段から身の回りのものの質感やあり方に目を向け観察してみるきっかけにもなったように思う【1】」



- 【1】・授業実践を契機とした、対象を観察する視点の広がり  
・「子犬」の臨本を分析することによる、教育的機能の理解
- 【2】・授業実践を繰り返して経験することによる、筆先の状態把握  
・授業実践と自身の制作活動との往還による筆法の熟達

大学院生 E

「次に自身の制作にかかせると感じた点は、小学生のモチーフの捉え方です。かぶのお手本を描く前にかぶのどの部分が難しいかを尋ねたところ、『光っている部分』と教えてくれた子がいました。私は絵手本のかぶの丸みは感じていましたが、光っていると感じていなかったためはどの部分のことかわかりませんでした。しかし、モチーフを柔軟に自分なりに読み解いている小学生をみて、しっかりとモチーフを観察していると感じました【1】。そのことにより、同じモチーフを描いていても作品一つ一つに個性が生まれるのだと思います。私も、小学生のような柔軟な捉え方を作品制作にかかし、自分にしか描けない作品を制作していきたいと感じました【1】」



- 【1】・個別指導における児童の反応を契機とした、対象を観察する視点の広がり  
・授業実践を通じた、自身の制作活動への客観視

※【1】：作画に関する宣言的知識、【2】：作画に関する手続き的知識

図5 日本画大学院生の省察的記述から抽出した作画に関する宣言的知識・手続き的知識

手続き的知識を「日本画制作における概念化が難しい感覚や認識」と位置づけた。日本画大学院生・5名が授業実践を通してどのような学びを得ることができたのかについて検討を試みたい。図5は、日本画大学院生が授業実践の経験（事前準備を含む）に基づいて自身の学びについての省察を記述したものである（記述全体から一部を抜粋した）。図中には、日本画大学院生が習得したと考えられる専門的力量を【1】【2】の観点から抽出したものを追記している。

【1】作画に関する宣言的知識に関して着目すると、複数の省察的記述から学びの成果を読み取ることができた。モチーフや臨本に対する造形的な見方に関する習得を読み取ることができる記述については、「私は椿という、描く順番、筆の向きが大切なお手本を担当しました（大学院生A）」、「筆一本と墨だけで短時間で再現出来るお手本ばかりだが、大学生でも学ぶところが多いとても優れたお手本だと再認識した（大学院生D）」「かぶのお手本を描く前にかぶのどの部分が難しいかを尋ねたところ、『光っている部分』と教えてくれた子がいました（大学院生E）」等が特筆される。いずれの記述からも対象を観察する視点の広がりや臨本の教育的機能への理解とともに、作画理論に関わる思考や認識の深まりが感じられる。そして「モチーフの骨格理解（大学院生A）」、「線は作品の骨格（大学院生C）」という記述からは、表面の描写にとどまらない作画への深い洞察が行われていたことが強く印象づけられた。

また、彩りがほとんどない墨の濃淡による表現に関する指導を行うことで、作画における色彩の原理についての思考を深める契機にもなったようである。その様子が下記において詳細に説明されている。

「水墨は墨の濃淡で色を表現する。それは、色味の組合せや彩度の煌めきではなく墨一色の淡いと濃いで世の色彩のすべてを表現する。言い換えると、改めてその墨の世界に色彩を孕んでいることを知った（大学院生B）」

墨がもつ特性や効果について色彩という視点で再考し、極めて論理的な分析を行っている。筆者らが3年生児童に提供した図画工作科授業の題材名である「黒と白とであざやかに」は、まさに上記の指摘を意図したものであった。3年生児童は、この墨の特性をめぐる指導の意図について発達段階に応じた理解や感じ方をしていると考えられる。その一方で指導を担当した日本画大学院生が濃淡と色彩の関係性について精緻な言語化を行い、この作画理論を実感的に理解していたことは意義深い。

一方で【2】作画に関する手続き的知識に関しても、複数の日本画大学院生が、3年生児童への指導を通して日本画制作に関わる操作や身体感覚について再考した傾向を

読み取ることができた。「筆の濡れ方や向きを逐一確認して児童に描かせる作業の中で、〔中略〕水分量に対する意識の低さに気づきました（大学院生A）」、「線は『枠』ではなく形そのものなのだとすることを、犬の絵一枚から学んだ（大学院生C）」という記述からは、授業実践やその事前準備の過程において、日本画制作に関する操作や身体感覚についての新たな気づきや発見を得たと推察される。

一般的に教授行為を行う際には、「教える側にも学びがある」という効果を期待できると考えられるが、これは美術実技分野においても十分に成立するのではないだろうか。前述の日本画大学院生らにとっては、指導やその事前準備を行うことによって、曖昧に認識していた日本画制作に関する操作や身体感覚を明確に説明（言語化）する必要に直面したと推察される。おそらく、授業実践の過程において、専門的な操作や身体感覚についての課題が解決したものもあれば、未解決のものもあると考えられる。3年生児童に指導を行う過程で、操作や身体感覚についての課題がどのように解決していくのかを検討する上で興味深いのは、以下の省察的記述である。

「お手本に関連して、初回の頃は写すことで精一杯だったが、回を重ねて様々な質感が組み合わせられている面白さを体感的に気付けるようになった。〔中略〕筆法や濃淡での質感表現を自身の制作でも生かそうと試みている（大学院生D）」

この記述を行った大学院生Dは、境谷小学校での授業実践に複数回参加しているため、作画に関する手続き的知識についての学びがより深まったのではないかと考えられる。そして記述の後半に示されているように、授業実践を重ねる間に、認識したことを自身の制作研究に往還させることにより、学習効果はさらに高いものになっているといえよう。

ここまで【1】【2】の観点によって、日本画大学院生がどのような学びを経験したのかについて論じた。5名の記述からは、日本画大学院生らがいずれの観点についても主体的に気づき、自身の感覚を通して深く学んでいった様子を確認することができた。おそらく、日本画大学院生が指導される立場（受け身の立場）のみの状態であれば両観点が分離しがちだが、指導する立場（主体的・能動的な立場）に立つことにより、【1】【2】の知識が互いに関わり合って（リンクして）働くようになってきているのではないかと考えられる。図5においては、両観点から整理することを試みたが、双方に跨がる気づきや学びが多く存在していたため、全ての省察的記述について体系的に検討できた訳ではない。しかし今回の芸術連携事業において課題としていた、各自が「どのような学びにつながったのか」を認識するという点については、一定の成果を



みることができたと考えている。そして、参加を重ねた日本画大学院生の省察的記述から、制作研究へのポジティブな影響を直接確認することができたことは、教育効果の明確な現れであるといえよう。このような大学院生への日本画教育を初等教育との架橋領域に位置づけたことに関する評価については、次章においてふれることとする。

## 5. 教育的効果の考察と架橋領域における意義創出

本研究の目的は、本学と境谷小学校との芸術連携事業が初等教育・高等教育、双方の教育的効果につながることを明らかにするとともに、架橋領域において授業実践を行うことの意義を創出することであった。

小学校の図画工作科における教育的効果としては、第3章において述べたように3年生児童の作品や記述等から筆の扱いなどを中心とする「創造的な技能」を高めるという学習につながったことがあげられる。また、本学の大学院生に対する日本画教育の効果としては、【1】作画に関する宣言的知識、【2】作画に関する手続き的知識に相当する内容を主体的に見出し、大学院生自身の感覚を通してそれらを学んでいく傾向があったことについて前章で報告した。特に、日本画大学院生の学びを2点に分類して整理を試みたことは、本研究における新たな着眼点であると考えている。

本研究において焦点を当てた、架橋領域で授業実践を行う意義については、次のように結論づける。日本画大学院生と3年生児童は、それぞれが指導する・指導される立場ではあるが、双方に知識または技能という教育的効果を認めることができた。換言すれば、指導する・指導される立場の双方が共通の教育目標をもつことによって、授業実践を通じた学びがより深いものになると考えられる。3年生児童にとっては、日本画を専門的に学ぶ大学院生から知識や技能に関する指導を受けることは、暗黙知を含んだ内容を学ぶことにつながるといえよう。3年生児童が経験した暗黙知は、小学校学習指導要領（図画工作）の〔共通事項〕に示されている「自分の感覚や行為を通して、形や色などの感じが分かること」<sup>15</sup>に通底するものである。一方、日本画大学院生にとっては、前述の暗黙知を言語化したり可視化したりすることによって、自身の制作研究を通して経験した学びを客観視する契機になったと思われる。それらを総括すると、架橋領域において授業実践を行う意義としては、1. 指導する・指導されるという立場を明確にすることによる学びの明確化、2. 教育内容を共通化することによる学びの効率化、の2点をあげることができる。

今後の課題としては、本研究において提示した日本画

大学院生の学びについて、さらに詳細な体系化を進めることがあげられる。日本画制作で求められる資質・能力を再定義することによって、知識・技能の他にも小学校図画工作科で習得する資質・能力との接点が存在することを明らかにできるのではないだろうか。次年度以降、継続して行う芸術連携事業においては、共通して扱う資質や能力を明確に設定し、架橋領域で授業実践を行う意義をより深いものにして提示したいと考えている。

### <付 記>

本研究は、京都芸術教育コンソーシアム・京都芸術教育研究事業の取組として実施した。芸術連携事業の推進および研究遂行にご協力いただきました京都市立境谷小学校の児童の皆さん、教職員の先生方、ならびに本学日本画研究室の大学院生の皆さんに感謝申し上げます。

### 註

- 1 川嶋渉・三橋卓・横田学・竹内晋平「小学校との連携による日本画教育の意味(1) - 学部生・大学院生を軸とした社会発信の試み -」, 『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』第61号, 2017年, pp.59-63
- 2 三澤一実「造形批評力獲得のためのプログラム開発 - 『旅するムサビ』の取り組みと『造形と批評』 -」, 『日本美術教育研究論集』第49号, 2016年, pp.155-162
- 3 本田悟郎「美術館ワークショップにおける子どもの造形表現と創造性 - 教員養成課程学生によるファシリテーション実践を通して -」, 『美術教育学研究』第47号, 2015年, pp.335-342
- 4 同上論文, p.341
- 5 筒井通子「芸術と教育Ⅳ - 地域への発信: 造詣表現「夢のたまご」を通して -」, 『紀要(奈良学園大学奈良文化女子短期大学部)』第45号, 2014年, pp.149-156
- 6 川嶋・三橋・横田・竹内, 前掲研究報告, p.60
- 7 この節全体に下記の国際学会の発表概要集および発表スライドを参照している。  
Takeuchi, S. (2017, Aug.). Effects of Using the Traditional Tsuketate Painting Technique in Modern Art Education, 35th InSEA World Congress, Daegu, Republic of Korea: Daegu Exhibition & Convention Center.
- 8 日本児童美術研究会『図画工作5・6下』, 日本文教出版, 2015年, pp.22-23
- 9 佐々木丞平「『付立』考」, 『研究紀要(京都大学)』第16号, 1995年, p.5
- 10 使用した臨本(画像)は、下記研究報告に掲載した図1~3および図5を参照。  
川嶋・三橋・横田・竹内, 前掲研究報告, p.60
- 11 高等学校における指導事例として下記の報告等があげられる。  
磯崎康彦・大竹恵理「高等学校美術科における水墨画の制作と鑑賞(1) - 水墨画の制作を中心に -」, 『福島大学教育実践研究紀要』第43号, 2002年, pp.17-20  
葉柳津盛・福田隆真「高等学校の美術教育における水墨画の教材研究」, 『教育実践総合センター研究紀要』第23号, 2007年, pp.93-102

- 12 美術手帖編集部「日本画の教育 美大の日本画科では何が行われているか?」, 『美術手帖』第60巻通巻903号, 2008年, pp.72-75
- 13 下川辰彦「日本画の制作過程と素材研究 宇宙を求めたための華」, 『現代教育学部紀要』第1号, 2009年, p.191
- 14 A.J. パーキン (野島久雄訳)「宣言的知識と手続き的知識」, M.W. アイゼンク編『認知心理学事典』, 新曜社, 1998年, pp.237-239
- 15 文部科学省 Web サイト「小学校学習指導要領」(2017.12.30 確認)  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661\\_4\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf)

#### 図版出典

- 図1 下記の論文に掲載した図を引用し加筆したものである。  
 Takeuchi, S. (2016). Meaning of Japanese traditional-style drawing lessons in current school education. *SYNNYT/ORIGINS*, 01/2016, p.37
- 図2 下記の国際学会発表スライドに使用した図を引用し加筆したものである。  
 Takeuchi, S. (2017, Aug.). Effects of Using the Traditional Tsuketate Painting Technique in Modern Art Education, 35th InSEA World Congress, Daegu, Republic of Korea: Daegu Exhibition & Convention Center.
- 図3 同上
- 図4 筆者撮影
- 図5 筆者撮影。省察的記述は日本画大学院生より提供を受けた。